



## 九月に想う

村 田 修 子

いろいろ、さまざまな人たちと話し合ってみますと、自分が子どもだった頃のことを全然覚えていないタイプと、全部が全部というわけではないにしても、印象深かった事柄については、ことこまかく覚えていてるタイプがあることを感じます。

いま私の目の前で、思い思いに活動している子どもたちは、こうやって夢中になってしたこと、楽しさをいっても覚えているほしいし、「この時代には楽しく遊ばせよう」と協力してくれる親と共に生活していることを忘れないでほしいと願わずにはいられないのです。

それは、大人になってから昔のことを思い出しながら語る人の顔には夢があり、童心が感じられるからなのです。「自分はいまあいうこともした。またこういうことをしたのとはともうれしかった。悲しかった。恐ろしかった。」

た。……」ということがあとになっても思い出せるのは、からだで感じ、心で感じたこと、つまり実際に体験したことではないかと思えます。

幼稚園生活を経験しなかった私は、九月に思い出すこととしては、小学校の低学年のときのこと、夏休みの終わったのが残念で残念でたまらなく、学校に行くのがとてもいやだった、ということでした。

海辺の町でしたから毎日海へ行くのですが、おもちゃのような電車で三十分ほどのって、雨が降ったらおしるこのようになりそうな、ぼこぼこの土ぼこりをあげながら、じりじりと太陽に照らされて小高いつち山のうねりを三つ越えるのです。

その度にうんざりとしながらも、海への魅力にひかれ

て、毎日ほこりまみれの松林の中をあえぎながら歩いたのですが、その道のかたわらにある池に、大きな萱草が生え、その中をとび交うおはぐるとんぼの群れに子ども心にも神秘さを感じ、それを見ることに期待を持ったことや、三つ目の小山を登り切ったとき、前方にきらきらときらめく海の水の輝きを見たときの興奮、また水遊びをしたあとでたべた甘いみたらしだんごやゆであずきの味は、今だに昨日のここのように思い出せるのです。

これは私にとって懐かしうれしいことであると同時に、現在子どもに接していく上でとても役に立っているのです。例えば、昨日の日曜日お父さんと釣にいかかにつかまえた話をしてくれる子どもがいると、岩の間へこわごわ手を入れる感じや、穴にそって砂を掘り下げていく、ざくざくとした砂の感じなどがよみがえってくるので、自然と子どもとの話に熱が入り、盛り上がりができるのです。

その子どもはかにとりをした経験に、話し合いをした経験を加えて、「かにとり」として覚えていくられるかもしれないのです。

ですから、私のまわりにいる子どもたちがどういうすごし方をしたならば、またどういう経験をしたらならば、この時期のことを覚えていられるのかしら、と思うのです。

といって子どもたちに目先のかわった刺激ばかり与えることは好ましくありませんので、私なりにありふれた普段の生活、活動を落ち着いた状態ですることによって、それに安定感を覚えて、案外こうした習慣化したことが印象づけられるものではないかしら、と思っっています。

それにしても昔のように自由に活動できる場が少なくなってしまったり、日常生活環境がちがってきてしまった現在では、九月になって園が始まり、そこで友だちと遊んだり、思う存分活動することを待ち望んでいるひとが多いのではないのでしょうか。

夏休みが終ることがいやでいやでたまらなかつた私とは大変なちがいで、子どもが利口になったというのか、分別ができてしまった感じですが、私はここいらに問題があるように思われてなりません。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)